

調査報告

女性の生活意識と生涯学習

—本学学生的生活意識と生涯学習調査から—

A Survey Concerning the Attitudes towards the Problems of Everyday Life and Lifelong Education of the Students of Our College

東 川 尅 美

KATSUMI HIGASHIKAWA

ABSTRACT

A survey was taken of the 333 first-year students of the Education and the English Courses of Hokusei Gakuen Women's College, concerning the attitudes towards the problems of everyday life. Its purpose was to get some basic materials for studying the attitudes towards life of those who belonged to two different courses, and their relationship with the lifelong education. The results and comments are as follows.

- (1) Friendship was chosen as the best of what to live for by both courses.
- (2) As for the essential conditions of the occupation, a steady income was chosen as the best by those of the Education course, and helpfulness and usefulness to the people and the world, by those of the English one.
- (3) As for the ideal occupations, the students of both courses chose a civil service and teaching at the elementary, junior or senior high school as worth doing. And the English-course students chose broadcasting, journalism and publishing as well.
- (4) The English-course students showed a remarkable awareness of the lifelong education.
- (5) Both courses showed the same, strong awareness of disadvantages in obtaining a job.
- (6) As for the education they want their children to take, especially the university one, they favored it for the boy more than the girl, showing sex discrimination.
- (7) As for the lifelong education, 79-82 % of the students of both courses chose the items, "necessary", or "very necessary".
- (8) As for reason for the lifelong education, both courses chose the item, "Because studying is fun and is something to live for as well." And as for ways of promoting the lifelong education, they chose, above all, the item, "to make full use of the qualifications."

緒 言

国際連合は1975年を国際婦人年と定めた。以来、女性たちは「平等・開発・平和」をめざして、多くの成果を勝ちとりながら前進してきた。そして国際婦人年から20年後の昨年、N G O フォーラム並びに第4回世界女性会議が、北京で開催された。この2つの集会在21世紀に向かって、男女平等と社会進歩、世界平和をいっそう推進する契機となるよう、いま世界の女性たちは熱い思いを寄せている。しかしながら、21世紀を目前にした現在も多様な差別は残り、むしろこれまでの女性たちの前進を押し戻そうとする動きさえ、世界各国で強まっている¹⁾。他方、わが国の生活環境は、近年大きな変化を示し、女性をとりまく家庭環境、社会環境も多様化を深めてきた。男女差別撤廃を目的とする法的環境整備が進み、女性の社会参加の状況も変化してはきたが、とりわけ昨今、女子学生に対する就職差別が一段と厳しさを増すとともに、男女間の賃金格差が広がりつつある。こうした現状を考慮すると、本学に学ぶ若い女性の生活意識を調査し、その調査結果に基づく生活意識の概観を明らかにしながら、女性にとって生涯学習の意味するものを把握し、今後の生活や学習の方向を考えることは、意義のあることと思われる。古崎等²⁾³⁾は、1980年に、札幌在住の家政系短大生を中心に、女性の意識についてのアンケート調査(以下80年値²⁾)を行い、1996年には、それにいくつかの項目と4年制女子大学生(以下4大生³⁾)を追加して「女性の生活意識と生涯学習—15年間の動向」と報告している。本報告は、これらの文献を参考にしながら同様の調査を行い、当短期大学における15年間の動向、並びに現時点での学科別の意識変化の程度を探ってみた。

I 調査の概要

1. 調査対象および調査方法

(1) 対 象

1年目に在籍する本学生活教養学科学生(略称北星短K)200名・英文学科学生(略称北星短E)133名、計333名を対象とした。

(2) 方 法

質問紙による自己記入法を用い、アンケート調査票(付表参照)を配布して、その場で記入させ回収した。

2. 調査項目

- (1) 生きがい
- (2) 職業意識
- (3) 将来の見通し
- (4) 子供に受けさせたい教育
- (5) 生涯学習

3. 調査時期 1995年 7月

4. 調査結果の処理

データの集計処理には、パソコンを使用した。

機種：NEC PC-9801

プログラム：多変量解析/JUSE-QC
ASR/MAI-JUST

日本科学技術研修所製作

II 結果と考察

本調査の結果を、生活教養学科と英文学科の生活意識と生涯学習の視点で分析を試みた。

(1) 生きがい(表1 参照)

現代の生活の中で、どんな事に生きがいを感じているかという設問の回答では、10項目中、両学科とも、友達との交際を第1位に選んでいた(北星短K 50%、北星短E 38%)。第2位は趣味・娯楽であった(北星短K 29%、北星短E 33%)。これ

らの傾向は古崎等の80年値⁹⁾、1993年総務庁青少年対策本部「世界青年意識調査」¹⁰⁾と一致する。

表1 生きがい

項 目	生活教養学科	英文学科
(1) 趣味・娯楽	53 (29)	33 (33)
(2) スポーツ	1 (1)	0 (0)
(3) 学業や研究	3 (2)	(4)
(4) 仕事や商売	1 (-)	1 (1)
(5) 財産をふやすこと	7 (4)	3 (3)
(6) 家事	1 (-)	0 (0)
(7) 家族との結びつき	6 (3)	5 (5)
(8) 友達との交際	92 (50)	38 (38)
(9) 社会的活動ボランティアなど	1 ()	0 (0)
(10) その他	19 (10)	17 (17)
計	184 (100)	101 (100)

※人数 (%)

(2) 職業意識

① 理想的職業の要件(表2参照)

理想的な職業をどのように考えているかという設問の回答のうち、多く選ばれたものは、収入が安定している職業(北星短K36%、北星短E19%)、人を助けたり、世の中に奉仕する職業(北星短K19%、北星短E23%)であった。北星短Kの学生は、収入安定志向が高く、北星短Eの学生は、「人を助けたり、世の中に奉仕とする」意識が高いことがうかがえる。

表2 理想的職業の要件

項 目	生活教養学科	英文学科
(1) 世の中を動かしていく職業	9 (4)	8 (6)
(2) 人を助けたり、世の中に奉仕する職業	37 (19)	29 (23)
(3) 世間からもてはやされる職業	4 (2)	2 (1)
(4) 人から尊敬される職業	15 (8)	10 (8)
(5) お金もうかる職業	12 (6)	10 (8)
(6) 平凡でも収入が安定している職業	72 (36)	25 (19)
(7) 人に使われず自分の力でやれる職業	33 (17)	19 (15)
(8) どれともいえない	9 (4)	15 (12)
(9) わからない	9 (4)	11 (8)
計	200 (100)	129 (100)

※人数 (%)

② 職業選択の条件と理想の職種(表3～表4参照)

「あなたが理想的だと思う職業は、どんな職業ですか」の設問に対して、第1位は両学科とも「やりがいを感じられること」の回答が顕著に高かった(北星短K50%、北星短E52%)。「具体的にあなたが理想と考える職業は」の設問の回答のうち、多く選ばれたものは公務員、小学・中学・高校の先生(北星短K38%、北星短E18%)で、北星短Eは放送・新聞・出版関係も18%と多くこの傾向は、専攻する学科の影響が大きい。

表3 職業選択の条件

項 目	生活教養学科	英文学科
(1) やりがいを感じられること	92 (50)	49 (52)
(2) 通勤に便利なこと	5 (3)	0 (0)
(3) 収入が多いこと	19 (11)	12 (12)
(4) 自分の能力や知識が高められること	13 (7)	15 (16)
(5) 希望の職種につけそうなこと	26 (14)	15 (16)
(6) 倒産しないこと	9 (5)	2 (2)
(7) 長く続けられること	11 (6)	2 (2)
(8) 休暇が多いこと	8 (4)	0 (0)
計	183 (100)	95 (100)

※人数 (%)

表4 理想の職種

項 目	生活教養学科	英文学科
(1) 政治家	2 (1)	1 (1)
(2) 会社経営	5 (1)	2 (1)
(3) 農林・漁業	0 (0)	0 (0)
(4) 店主・職人	7 (4)	3 (2)
(5) 会社員	22 (11)	20 (15)
(6) 公務員・小学・中学・高校の先生	75 (38)	24 (18)
(7) 俳優・歌手・運動選手	1 (-)	2 (1)
(8) 放送・新聞・出版関係	16 (8)	24 (18)
(9) 医者	5 (3)	5 (4)
(10) 弁護士	3 (2)	2 (1)
(11) 学者・研究者	6 (3)	1 (1)
(12) その他・わからない	56 (28)	48 (37)
計	198 (100)	132 (100)

※人数 (%)

表5 卒業後の進路

項 目	生活教養学科	英文学科
(1) 民間の企業や団体に就職したい	69 (35)	69 (52)
(2) 官公庁に就職したい	31 (16)	9 (7)
(3) 学校(小中高)の教師に	15 (7)	5 (4)
(4) 家業をつぎたい(自営業)	1 (-)	0 (0)
(5) 家業をつぎたい(農・林・漁・牧畜)	0 (0)	0 (0)
(6) 自分で店をもったり、商売をしたい	6 (3)	2 (1)
(7) 農業・林業・漁業・牧畜などをしたい	0 (0)	0 (0)
(8) とくに就職しないで、自分の特技を	6 (3)	8 (6)
(9) とくに就職しないで、結婚したい	2 (1)	3 (2)
(10) さらに進学したい	29 (15)	16 (12)
(11) 留年のつもり	1 (-)	2 (1)
(12) まだ決めていない	39 (20)	19 (14)
計	199 (100)	133 (100)

※人数(%)

③ 就職分野の傾向と卒業後の進路(表5参照)

就職分野の傾向は、民間企業を選んだものが最も多く(北星短K 35%、北星短E 52%)、次いで官公庁(北星短K 16%、北星短E 7%)、学校(小中高)の教師(北星短K 7%、北星短E 4%)であった。教師はやりがいのある職種ではあるが、教員採用試験登録率が低いので、敬遠されていると言えよう。進学志向は、古崎等の80年値²⁾(5%)より両学科ともに増加(北星短K 15%、北星短E 12%)が目立った。

④ 職業継続意識(表6参照)

生涯職業を継続したいとする意識は、北星短Kに比して北星短Eにひときわ高く(北星短K 19%、北星短E 30%)、これらはいずれも注目に値する。子育て後の再就職希望は、両学科とも高く(北星短K 57%、北星短E 59%)いずれも半数以上であった。職業継続意識と子育て後の再就職希望を合わせると、就職意識は強いと言える(北星短K 76%、北星短E 89%)。

全国レベルの調査³⁾でみると生涯職業を継続したいとする意識は1972年では11.6%、1984年は20.1%、そして1992年では26.3%と生涯職業意識は急速に増加している。子育て後の再就職希望割合は、45.4%と依然として最も高い。

北星短Eの職業継続意識と子育て後の再就職希望意識は、いずれも全国レベル(1992年調査値⁴⁾)より高かった。

表6 女性の職業観

項 目	生活教養学科	英文学科
(1) 女性は無業を持たないほうがいい	2 (1)	1 (1)
(2) 結婚するまで職業を持つ	25 (13)	8 (6)
(3) 子供ができるまでは職業を持つ	20 (10)	6 (4)
(4) 子供ができてもずっと職業を	38 (19)	40 (30)
(5) 子供ができたら職業をやめ、子育て後再就職	114 (57)	78 (59)
計	199 (100)	133 (100)

※人数(%)

⑤ 女性の就職についての不利感(表7～表8参照)

就職の時、男性に比して女性是不利だとする意識(北星短K 74%、北星短E 83%)は、社会環境の整備が進んだにもかかわらず増加している(80年値²⁾ 53%)。就職の時、女性に不利である理由については、「企業のしくみが男性に有利だから」と考えるものが最も多い(北星短K 47%、北星短E 47%)。「女性は長続きしないとみられているから」という意識(北星短K 21%、北星短E 16%)、「男性が女性に対して偏見をもっているから」という意識(北星短K 19%、北星短E 16%)は、両学科とも、ほぼ同じ傾向を示した。現在の不況の影響から就職意識はありながら就職できない現況が、この不利感増加の大きな要因のひとつになっていると考えられる。

表7 就業と男女差別

項 目	生活教養学科	英文学科
(1) 不利だと思う	148 (74)	110 (83)
(2) 不利だと思わない	11 (6)	8 (6)
(3) どちらともいえない	34 (17)	14 (10)
(4) わからない	7 (3)	1 (1)
計	200 (100)	133 (100)

※人数(%)

表8 女性の不利な理由

項 目	生活教養学科	英文学科
(1) 社会や企業のおくが、男性に有利	69 (47)	52 (47)
(2) 男性が女性に対して偏見を持っている	28 (19)	17 (16)
(3) 女性は長続きしないとみられている	31 (21)	18 (16)
(4) 女性は意欲や責任が乏しいとみられている	14 (9)	15 (14)
(5) 女性は体力の点からいって…	3 (2)	5 (5)
(6) その他	3 (2)	3 (2)
計	148 (100)	110 (100)

※人数 (%)

(3) 将来の見通し

これからの世の中の見通しについては、表9～表11のとおりである。

表9 学歴主義と能力主義

項 目	生活教養学科	英文学科
(1) そう思う	45 (23)	38 (29)
(2) そう思わない	42 (21)	23 (17)
(3) そう思いたい	104 (52)	64 (48)
(4) わからない	9 (4)	8 (6)
計	200 (100)	133 (100)

※人数 (%)

表10 年功序列と能力主義

項 目	生活教養学科	英文学科
(1) そう思う	70 (35)	45 (34)
(2) そう思わない	39 (20)	23 (17)
(3) そう思いたい	54 (27)	43 (32)
(4) わからない	37 (18)	22 (17)
計	200 (100)	133 (100)

※人数 (%)

表11 仕事と家庭

項 目	生活教養学科	英文学科
(1) そう思う	56 (28)	30 (23)
(2) そう思わない	42 (21)	27 (20)
(3) そう思いたい	73 (37)	45 (34)
(4) わからない	29 (14)	30 (23)
計	200 (100)	132 (100)

※人数 (%)

A [これからの世の中は、学歴より本人の才能や能力が重視される]

両学科の意識は、ほぼ同傾向を示した。「学歴よりも本人の能力や才能などが重視される世の中になってほしい」と回答した人は、北星短K52%、北星短E48%、「なるだろうと思う」人は、北星短K23%、北星短E29%だった。

B [これからは年功序列よりも能力を重視して昇進や昇給を決める会社が多くなるだろう]

「年功序列よりも能力が重視されるようになってほしい」と答えた人は、北星短K27%、北星短E32%で、「なるだろうと思う」人は、北星短K35%、北星短E34%であった。肯定的意識「そう思う」と「そう思いたい」は、設問Aと違った傾向が見られた。否定的意識「そうは思わない」人は、17～20%で、設問Aと同じ傾向を示した。

C [これからは仕事よりも家庭や個人の生活を大切にすることが多くなるだろう]

「個人の生活を大切にようになってほしい」と答えた人は、北星短K37%、北星短E34%、(4大生³⁾ 36%、80年値²⁾ 17%)、「なるだろう」と肯定する人は、北星短K28%、北星短E23%、(4大生³⁾ 27%、80年値²⁾ 46%)で、いずれも80年値と95年調査値の間になんかの意識差を示している。A～Cの設問に関して、本学短大生の意識は4大生のものと、ほぼ同傾向を示した。

(4) 子供に受けさせたい教育(表12～表13参照)

両学科とも、本人の意思にまかせるという回答が、44～64%と高かった。特に女の子に対して、「本人の意思にまかせる」と望んでいる割合が高かった(北星短K51%、北星短E64%)。

高等教育への期待、「将来自分の子供にどの程度の学歴を望んでいるか」80年値²⁾は、「4年制大学を希望する」男の子32%、同女の子9%であった。本調査では、女の子に4年制大学を望む意

識がかなり強くなっていることが示された(北星短K26%、北星短E20%)。しかし、男の子にも4年制大学進学を望む意識が増加した結果が得られ、男の子への4年制大学の期待値(北星短K53%、北星短E40%)と、女の子へのその期待値とは大きく異なっている。この意識は両学科に共通していて、男女差はまだ存在していることが示された。4大生³⁾の意識は明らかに女子短大生と異なり男の子への4年制大学の期待値(35%)と女の子への4年制大学期待値(32%)は、それほど開きはない。

厚生白書⁴⁾によると、大学・短大への進学率は、89(平成元)年以降女性の進学率が男性を上回り、94(平成6)年現在、女性45.9%、男性40.9%と女性の方が高くなっている。女性の場合には、短大の進学率の割合が高いのが特徴であったが、近年女性の大学進学率の伸びが大きく、短大と大学の進学率には、ほとんど差がなくなりつつある。学生が「将来自分の子にどの程度の学歴を望んでいるか」についての本調査結果は、前記のとおりである。同項目で行われた95年道民生活白書⁵⁾によると、現在の親が女の子に期待する学歴は、「短大・高専まで」(35.2%)と「大学まで」(33.9%)がほぼ横並びの状況である。93(平成5)年の全国調査⁶⁾「短大・高専まで」(40%)、「大学まで」(35%)と、ほぼ同様の傾向を示していた。一方、男の子に対しては「大学まで」(63.1%)と答えた人の割合が高かったが、全国平均より約7%低かった。男の子の傾向について、道生活福祉部⁷⁾は「道内の大学進学率が全国34位(94年)と低いことや、専修学校や各種学校に進ませたい親の多いことが影響しているのではないか」と分析している。以上のことから全国・道レベル・本調査値でも自分の子供に対して、将来どの程度の学歴を望んでいるかの期待値は、男の子と女の子に対して、まだかなり異なる期待値を示している。

表12 女の子の教育程度

項 目	生活教養学科	英文学科
(1) 中学校まで	0 (0)	0 (0)
(2) 高校まで	1 (-)	0 (0)
(3) 短大・専門学校まで	42 (22)	16 (13)
(4) 4年制大学まで	50 (26)	25 (20)
(5) 大学院まで	2 (1)	2 (2)
(6) 本人の意思にまかせる	100 (51)	81 (64)
(7) わからない	0 (0)	3 (3)
計	196 (100)	127 (100)

※人数(%)

表13 男の子の教育程度

項 目	生活教養学科	英文学科
(1) 中学校まで	0 (0)	0 (0)
(2) 高校まで	1 (-)	0 (0)
(3) 短大・専門学校まで	0 (0)	0 (0)
(4) 4年制大学まで	104 (53)	51 (40)
(5) 大学院まで	5 (3)	2 (2)
(6) 本人の意思にまかせる	85 (44)	70 (56)
(7) わからない	0 (0)	3 (2)
計	195 (100)	126 (100)

※人数(%)

(5) 生涯学習

国民の生活水準の向上、余暇時間の増大、さらに高齢化の進展に伴って、人々のライフスタイルは多様化し、文化・教養、心の豊かさ・健康を求める多様な学習意欲が高まってきた。また、高度情報化、高度技術化、国際化が進み、とりわけ職業人において、新しい知識や高度な技術の取得をめざす学習意欲が、増大してきている⁸⁾。このような環境変化の中で、今回の調査結果を踏まえながら、生涯学習の果たす役割について考察する。

表14 生涯学習の必要性

項 目	生活教養学科	英文学科
(1) 非常に必要	27 (13)	18 (14)
(2) 必要	131 (66)	91 (69)
(3) 必要でない	8 (4)	3 (2)
(4) わからない	34 (17)	0 (15)
計	200 (100)	132 (100)

※人数(%)

① 生涯学習の必要理由については、両学科の79～83%の学生が「必要」・「非常に必要」と答えている(表14参照)。

② 生涯学習の必要理由については、両学科とも「何かを学ぶと楽しいし、生きがいを感ずる」の項目(北星短K42%, 北星短E47%)を第1位に選んでいた。第2位に選ばれていたのは、北星短Kの学生が「情報社会となったから」と答え、北星短Eの学生は「国際間の交流がふえたから」の項目を選んだものが多かった。ついで北星短Kは「生活の規範を打ち立てたい」、北星短Eは「情報社会となったから」などの項目を選び、この傾向は、専攻する学科の影響が大きい(表15参照)。

表15 生涯学習必要性の理由

項 目	生活教養学科	英文学科
(1) 寿命がのびたから	4 (2)	3 (3)
(2) 核家族化したから	2 (1)	0 (0)
(3) 情報社会となったから	47 (24)	13 (11)
(4) 生活の規範を自分で打ち立てたい	20 (10)	11 (10)
(5) 国際間の交流がふえたから	10 (5)	18 (16)
(6) 以前の学習や技術が役に立たなくなった	11 (6)	8 (7)
(7) 公害が起きたから	2 (1)	0 (0)
(8) 時間があまっているから	1 (-)	1 (1)
(9) 何かを学ぶと楽しい生きがいを...	82 (42)	53 (47)
(10) 困っている人の力になりたいから	3 (2)	2 (2)
(11) 地域をよくしたいから	1 (-)	0 (0)
(12) その他・わからない	13 (7)	4 (3)
計	196 (100)	113 (100)

※人数(%)

③ 生涯学習推進方策としては、「修了資格が職業に生かされること」を1位に選んだ学生が多く(北星短K36%、北星短E27%)、次いで「学習のための施設を作る」・「大学の開放」であった(表16参照)。

表16 生涯学習を進める条件

項 目	生活教養学科	英文学科
(1) 近くの小・中・高校などの開放	10 (5)	5 (5)
(2) 大学の開放	19 (10)	18 (16)
(3) 学習のための施設を新しく作る	28 (15)	18 (16)
(4) 修了資格が職業に生かされること	68 (36)	30 (27)
(5) 託児施設の普及	12 (6)	8 (7)
(6) 身近な問題のプログラム	18 (9)	10 (9)
(7) ボランティア活動の技術取得プロ.	12 (6)	4 (4)
(8) 地域の環境問題解決のためのプロ.	5 (3)	2 (2)
(9) 資格取得のできる技術	13 (7)	11 (10)
(10) 学問的レベルの高いもの	1 (-)	1 (1)
(11) その他	5 (3)	3 (3)
計	191 (100)	110 (100)

※人数(%)

人生80年時代⁹⁾といわれる長寿社会の中で、これまでの自らの生き方を再編成し、生きがいを求めて、多くの人たちは「学び」をはじめている。仕事人という生活スタイルからの脱却と心の豊かさや人間性の幅の拡大をめざして、多面的な学習やスポーツに取り組む人、増大する余暇時間の有意義な活用を求める人、各種の教養活動や資格取得を楽しむ人等、それぞれの目的と願いをこめて、いま生涯学習は、人びとの中に浸透しつつある。生涯学習社会の実現という社会全体の動きの中で、今回の調査と生涯学習の推進方策とを併せて考えると、若い世代の学生達が社会の変化を敏感に受け止め、学校教育の中では得られない実際の学習を、生涯学習の中で学びたいという強い意識を示していることは意味深い。初等中等教育の分野では、先の学習要領の改訂において、「自己教育力の養成」が基本的目標のひとつとされているが、高等教育の分野でも、すべての学生について「自己教育(自ら学び続ける態度・能力)」を育成すると共に、より新しい知識や技術習得のためにも、生涯学習の必要性は今後一層高まっていくと予想される。

Ⅲ 要 約

本学生生活教養学科・英文学科1年目に在籍する短大生333名を対象に、若い女性の生活意識調査を行った。全く専門を異にする2学科の学生の、生活意識を概観するための基礎資料を得ること、生涯学習構想との関連などを明らかにすることを目的とした。

- (1) 「現代の生活の中で、どんな事に生きがいを感じるか」の意識は、両学科とも「友達との交際」を第1位に選んでいた。
- (2) 理想的職業の要件は、生活教養学科の学生に「収入安定型志向意識」が高く、英文学科の学生は、「人を助けたり、世の中に奉仕する意識」が高かった。
- (3) 理想的職業選択の条件は、両学科とも「やりがいを感じられる職業」であり、理想的な職業は公務員、小学・中学・高校の先生であった。英文学科の学生は、放送・新聞・出版関係も同レベルに選んでいた。
- (4) 生涯職業継続意識は、英文学科の学生にひときわ高かった。
- (5) 就職の時、男性に比して「女性是不利だ」とする意識は、両学科とも高かった。
- (6) 子供に受けさせたい教育「4年制大学を希望する」では、男の子への期待が高く、女の子のそれとの男女差は、相変わらず存在していた。
- (7) 生涯学習の必要性については、両学科の79～83%の学生が「必要」・「非常に必要」と答えていた。
- (8) 生涯学習の必要理由については、両学科とも「何かを学ぶと楽しいし、生きがいを感じるから」と答え、生涯学習推進方策としては、「資格が生かされること」が際立っていた。

この調査に関して、静修短期大学古崎和代教授、そのほか関係各位のご協力に深謝致します。

引用文献

- 1) 日本婦人団体連合会編、(1995)婦人白書、p2、ほるぷ出版
- 2) 佐々木隆介、古崎和代、野田豊子、(1980)女性の生活意識と生涯教育、藤女子大学・藤女子短期大学紀要18：77-92
- 3) 古崎和代、野田豊子、佐々木隆介、(1996)女性の生活意識と生涯学習-15年間の動向-、静修短期大学紀要27：73-84
- 4) 総務庁青少年対策本部編、(1996)平成7年度版青少年白書、p29、大蔵省発行
- 5) 厚生省編、(1996)平成8年版厚生白書 13-20、ぎょうせい
- 6) 北海道生活福祉部総務課編、(1996)平成7年度版道民生活白書
- 7) 北海道新聞、(1996)4月23日朝刊
- 8) (財)日本生涯学習総合研究所編、(1994)生涯学習情報年鑑、p3、日本生涯学習総合研究所
- 9) 日本生涯教育学会編、(1994)生涯学習事典、はしがき、東京書籍

女性の生活意識と生涯学習についてのアンケート

1980年、女性の意識についてのアンケート調査をし、「女性の生活意識と生涯教育」としてまとめました。それから15年経過しました。この秋札幌で「全国生涯学習フェスティバル」が行われます。そのセミナーでの報告をめざし、女子短大生、女子大学生、看護学生、そして幼稚園児を持つ母親の方々に再びアンケート調査をお願いしております。前回の設問にいくつかの項目を加えました。女性の意識の一端を調べ、女性の今後の生活や学習の方向を考える資料といたしたいと思います。本年は国連婦人の20年を記念して、8月に北京で、「世界婦人会議」が開かれる年でもあります。この間、日本でも男女差別撤廃についての法的状況整備が進んできています。また女性の社会参加の状況も変化してきています。しかし、その意識の面ではどのような変化があったのか、あるいはなかったのか、大いに関心のあるところです。皆様の素直な意見を記入していただけますことを願っています。

1995年7月

問 1 あなたは現在の生活の中で、どんな事に生きがいを感じていますか。リストの中にあてはまるものがあれば、3つ〇印をつけてください。その中で特に重要と思えるもの1つだけ◎印をつけてください。

- (1) 趣味・娯楽 (2) スポーツ (3) 学業や研究 (4) 仕事や商売
- (5) 財産をふやすこと (6) 家事 (7) 家族との結びつき (8) 友達との交際
- (9) 社会的活動(ボランティアなど) (10) その他()

問 2 世の中には、いろいろな職業がありますが、あなたが理想的だと思うのは、どんな職業だと思いますか。リストのように分けた場合どれが一番近いでしょうか。1つだけ〇印をつけてください。

- (1) 世の中を動かしていく職業 (2) 人を助けたり、世の中に奉仕する職業
- (3) 世間からもてはやされる職業 (4) 人から尊敬される職業
- (5) お金もうかる職業 (6) 平凡でも収入が安定している職業
- (7) 人に使われず自分の力でやれる職業
- (8) どれともいえない(例えば……のようなもの) (9) わからない

問 3 仕事や職場を選ぶとき次のどの点を重視しますか。3つ〇印をつけてください。その中でとくに重要と思えるもの1つだけ◎印をつけてください。

- (1) やりがいが感じられること (2) 通勤に便利なこと (3) 収入が多いこと
- (4) 自分の能力や知識が高められること (5) 希望の職種につけそうなこと
- (6) 倒産しないこと (7) 長く続けられること (8) 休暇が多いこと

問 4 では、リストのように具体的に分けた場合、どれが理想的な職業だと思いますか。あなたのお考えに一番近いもの1つだけに○印をつけてください。

- (1) 政治家 (2) 会社経営 (3) 農林、漁業 (4) 店主、職人 (5) 会社員
- (6) 公務員、小学・中学・高校の先生 (7) 俳優、歌手、運動選手
- (8) 放送・新聞・出版関係 (9) 医者 (10) 弁護士 (11) 学者、研究者
- (12) その他、芸術家、宗教家、わからない

問 5 あなたは卒業後どんな道に進むことを望んでいますか。1つだけ○印をつけてください。

- (1) 民間の企業や団体に就職したい (2) 官公庁に就職したい
- (3) 学校(小中高)の教師に (4) 家業をつぎたい(自営業) (5) 家業をつぎたい
(農・林・漁・牧畜) (6) 自分で店をもったり、商売をしたい (7) 農業・林業・漁業・牧畜などをやりたい (8) 特に就職しないで、自分の特技や才能を生かしたい (9) 特に就職しないで、家にいたい、結婚したい (10) さらに進学したい
- (11) 留年のつもり (12) まだ決めていない

問 6 女性が職業を持つことについてどのように考えますか。次の中から1つだけえらんで○印をつけてください。

- (1) 女性は職業を持たないほうがいい (2) 結婚するまで職業を持つほうがいい
- (3) 子供ができるまでは職業を持つほうがよい
- (4) 子供ができてもずっと職業を続けるのがよい
- (5) 子供ができたら職業をやめ、大きくなったら再び職業を持つほうがよい

問 7 A 就業に関して、女性は男性に比べて、不利だと思いますか、そうは思いませんか。

- (1) 不利だと思う (2) 不利だとは思わない (3) どちらともいえない
- (4) わからない

問 7 B 問7 Aで(1) 不利だと思うと答えた方のみお答えください。では女性が不利だと思うのはどうしてでしょうか。リストの中から1つだけえらんで○印をつけてください。

- (1) 社会や企業のしくみが、男性に有利にできているから (2) 男性が女性に対して偏見を持っているから (3) 女性は長続きしないとみられているから
- (4) 女性は意欲や責任が乏しいとみられているから (5) 女性は体力の点からいって無理がきかないとみられているから (6) その他

問 8 次のAからCまでのそれぞれについて、「そう思う」「そう思わない」などについてお答えください。AからCまでのそれぞれについて、あてはまる番号に○印をつけてください。

A これからの世の中は、学歴よりも本人の才能や能力が重視される

- (1) そう思う (2) そう思わない (3) そう思いたい (4) わからない

B これからは、年功序列よりも能力を重視して、昇進や昇給を決める会社が多くなるだろう

- (1) そう思う (2) そう思わない (3) そう思いたい (4) わからない

C これからは仕事よりも家庭や個人の生活を大切にする人が多くなるだろう

- (1) そう思う (2) そう思わない (3) そう思いたい (4) わからない

問 9 子供に受けさせたい(学生は将来自分の子に…)と考える教育程度はどの位ですか。男の子と女の子とで違いますか。該当するところに○印をつけてください。

	女の子に	男の子に
(1) 中学校まで	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
(2) 高校まで	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
(3) 短大・専門学校まで	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
(4) 4年制大学まで	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
(5) 大学院まで	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
(6) 本人の意思にまかせる	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
(7) わからない	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>

問 10 生涯にわたる学習は必要だと思いますか。つぎの中からえらんでください。

- (1) 非常に必要 (2) 必要 (3) 必要でない (4) わからない

問 11 生涯にわたる学習はどんな理由で必要となってきたと考えますか。3 つ○印をつけてください。その中でとくに重要と思えるもの1つだけ◎印をつけてください。

- (1) 寿命がのびたから (2) 核家族化したから (3) 情報社会となったから
 (4) 生活の規範を自分で打ち立てたいから (5) 国際間の交流がふえたから
 (6) 以前の学習や技術が役立たなくなったから (7) 公害が起きたから
 (8) 時間があまっているから (9) 何かを学ぶと楽しい生きがいを感じるから
 (10) 困っている人の力になりたいから (11) 地域をよくしたいから
 (12) その他・わからない

問 12 生涯学習を進めるために、どのような施設、状況の整備、また学習プログラムなどが必要だと思いますか。3つ○印をつけてください。その中でとくに重要と思えるもの1つだけ◎印をつけてください。

- (1) 近くの小・中・高校などの開放 (2) 大学の開放 (3) 学習のための施設を新しく作る
 (4) 修了資格が職業に生かされること (5) 託児施設の普及
 (6) 身近な問題のプログラム (7) ボランティア活動の技術取得のためのプログラム
 (8) 地域の環境問題解決のためのプログラム (9) 資格取得のできる技術
 (10) 学問的レベルの高いもの (11) その他